



郵便
報知新聞
 第五百七十六号

ワライで轉ぶ妓の半點許」と誰が
 口癖と川柳何ぞの詠と和漢蘭の
 かつた夫と讀され「往來で爺と妓の
 轉ぶは是へ綴りのえんらん所へ嘘の
 本所の内かあれと外手町も月三十日
 午後一時の兩人の柄な者技も次女も霞
 町小評判高きかきん小濱年二十とニッ
 三四の足撥と早めつ泥路蹴さそく
 真暮星田小白く消残る雪の跡さそ
 阿りやゆ我思ふ人は追付むと行手
 の路の出合頭六十の公羽の身と避のにも
 暇るは物の美妻は素轉倒ハット思
 と夫あつは往んとさる目捷さ巡査翁
 と接あそ之と起一入馬より御まて
 蹴るかに左り寝とて也一ひつこり



大福
 印

